

## 日本ジャーナリスト連盟の 結成と新聞単一（中）

——増山太助氏\*に聞く



はじめに

- 1 資料の収集と研究の意義
- 2 読売入社と敗戦（以上、第593号）

3 日本ジャーナリスト連盟の結成（本号）

- 4 日本ジャーナリスト連盟と新聞単一
- 5 日本ジャーナリスト連盟の活動

### 3 日本ジャーナリスト連盟の結成

#### 熱気に満ちた創立大会

——日本ジャーナリスト連盟は、1946年1月31日の日曜日、東京・芝御成門日赤本社の講堂において創立大会を開き正式結成をみました。創立大会は日映（日本映画社）により録画され、「日映ニュース」として全国に報道されたようですね。

増山 そうです。創立大会は熱気に満ちておりました。大会は傍聴を認めたので超満員でした。「創立準備委員」といった名称などありませんでしたが、大会までは読売従組が準備を担いました。

読売従組といっても組合長の鈴木東民さんは編集局長で、他にいくつもの仕事を兼ねていたので、實際上、組合の主事だった渡文こと渡辺文太郎さんや私が代理として担いました。だから私は復社して2、3か月間は、経済部の記者として、また読売従組の書記長として、さらには日本共産党の読売細胞の細胞長として、まるで「戦場」であるかのような激烈で多忙な毎日をおくっていました。

創立大会の会場が日赤本社の講堂となったのは、私が臨時東京第三陸軍病院の主計官として召集中に知己を得た、日赤本社の有力者の方をお願いして便宜を図ってもらいました。読売本社もそうですが、東京は戦争中に公共施設の多くが空襲で焼失しました。当時、会場として利用できるのは日比谷公会堂、神田共立講堂（共立女子大）、新橋の飛行館（現在の航空会館）くらいで、500人を超す規模の会場を確保することはとても大変だったのです。

—— 創立大会は午後1時に開会され、小野俊一（民衆新聞社社長）さんが議長になって議事をすすめ、長島又男（民報社主筆）さんの報告が「日本ジャーナリスト聯盟設立の経過」、鈴木東民（「読売」編集局長）さんの「一般運動方針（案）」が提案され拍手をもって承認されました。

ほかに、山内俊雄（「東京新聞」）さんが「文化団体民主戦線結成促進の件」を、また「朝日」論説委員の聴濤克巳（きくなみ・かつみ）さんが「民主主義共同戦線促進の件」を提案しています。

創立大会はこれらの議案を順次、審議・可決し、最後に「民主主義的ジャーナリズムの

確立」など5項目に及ぶ綱領を討議し、満場一致でこれを採択して創立大会は終わりました。

**増山** 会場は言論・出版の自由や、表現の自由を得た喜びが漲っていましたね。私自身、会場の熱気に身震いするほどでした。創立大会においては、第一線から退いたけれども大正デモクラシー期の「東京日日」（「東京毎日」の前身）の論説を主筆としてリードした阿部真之助さんや、のちに「日経」の社長になる円城寺次郎さんも出席しておりました。「日経」といえば往年のコミュニスト、「クートベ組」の堀卯太郎さんも傍聴していました。

私は創立大会で、創立の準備委員として会場の設営と運営の責任者を務めました。私は新聞人として若輩です。けれども読売争議（第1次）に勝利した労働組合の書記長という肩書がありましたから、名前が知られていて、当日出席した新聞人や論壇の著名人からねぎらいや挨拶の言葉をかけられました。

発起人となった時事通信社の安達鶴太郎さんや、のちに共同通信社の専務理事となる永山公明さんからも「準備ご苦労様」とか、「本日はおめでとう」とねぎらわれて恐縮しました。中野重治さんや、文連（日本民主主義文化連盟）で交流を深めた岩崎昶、小野康人さんも出席していて励まされました。

### 発起人の人選

——日本ジャーナリスト連盟の「発起人氏名一覧」を見ますと、鈴木東民、聴濤克巳、阿部真之助、円城寺次郎、小野俊一、長島又男さんをはじめ新聞、通信、放送、出版、ニュース映画の製作者、さらに中野重治さんや臼井吉見、中島健蔵、山川均などの評論家も含まれております。発起人に名を連ねた方はどなたも、戦後日本のジャーナリズム界や論

壇で活躍された方々ばかりです。出版関係者では岩波書店の吉野源三郎さんも発起人となっていますね。

**増山** そうです。私が直接、岩波書店に出向いてお願いしました。吉野さんは当初、発起人になることを躊躇されていた。吉野さんは『世界』を創刊（1946年1月）したばかりで多忙だったのででしょう。

しかし占領期の日本ジャーナリズム運動は、新聞単一（日本新聞通信放送労働組合）の役員人事でも、新聞では朝毎読の大手の総合3紙、通信では「共同」と「時事」、放送では日本放送協会（NHK）、そして出版を含む場合は岩波書店が一枚噛まないことには収まりがつかない現実がありました。発起人中、新聞界を見ても「朝日」では論説委員の聴濤克巳、「読売」は編集局長の鈴木東民、「毎日」から顧問の阿部真之助さんを立てました。

—— 発起人代表はどなたですか。

**増山** だから代表は決めなかった。いや、決めてはならなかった。ジャーナリスト連盟の設立から10日目に新聞単一が結成されました。聴濤さんが委員長になりましたが、就任に際して東民さんと一悶着があったのです。東民さんは副委員長に就任しましたが納得していなかった。東民さんは私に「これは誰が決めたのだ。徳田球一か志賀（義雄）か」と問い詰めました。東民さんは「俺が俺が」という意識がとても強い。確かに東民さんは博識で実力がありました。弁も立つ。けれどもエリート意識丸出しで自信過剰なところがありました。

### 東民と小野俊一

**増山** 長島又男さんが当時、東民さんを抑えられるのは小野俊一さんだけだろうと話していました。小野さんの方が年輩ですが、二人とも個性が強い。

小野さんは動物学者で、京都帝大の助教授時代に「マルクス主義の生理学的応用」とかとてもない講義をして学生を仰天させ（笑）、同僚からは非難され、そんなこともあって小野さんは京都帝大を辞めたそうです。

動物学の講座でマルクス主義を紹介するヘンな先生がいたという話は、私が在学中にも語り継がれていました。小野さんの最初の奥さんはヴァイオリニストとして世界的に有名な小野アンナさんですよ。

—— 存じています。小野さんは京大を辞められた後、事業家に転身して「ジャパントイムズ」の経営や安田財閥系の事業会社の経営にタッチし、敗戦後は新興紙「民衆新聞」を発行していますね。僕は先年「民衆新聞」を調べていて驚いたことがあります。小野さんは1945年11月2日の日本社会党の創立大会で司会をなさっています。

**増山** 小野さんは戦争以前から山川均さんや荒畑寒村さんと交流があったようです。小野さんは、戦争中は労農派系の学者の生活を助けていたとのことでした。私は戦争中「読売」の論説委員だった石浜知行さんや、東民さんが編集局長だったときの経済部次長の渡辺文太郎さんから聞いています。

「民衆新聞」は長島さんの「民報」と同じく、GHQの後押しで生まれた新聞です。私も共販店で買って読んでいました。「民衆新聞」は大手紙が及び腰のテーマを扱って進歩のオピニオンをリードしていましたね。「進歩のオピニオン」というよりは、小野さん自身「新聞は戦争責任を追及するため発行した」と言っていたのですが、私は「民衆新聞」に対しては「戦争責任を追及した政論紙」という印象をもっています。

ところで東民さんと小野俊一さんに共通する特徴ですが、私は、二人ともリパブリカンで、

急進的かつ戦闘的なりベラリストとして見ています。鎌田慧さんが14、5年前に『反骨——鈴木東民の生涯』（講談社、1989年）を出版しましたね。私は取材を受けて「東民さんは権力に対して剥き出して抵抗するジャーナリスト」と評しましたが、彼の性格を一言で表すとやはり「反骨」なんですね。

### 吉野源三郎を発起人に推薦

**増山** 発起人の話に戻します。吉野源三郎さんに発起人になってもらうため私は細工をしました。吉野さんは当初、ジャーナリスト連盟の結成に対してきわめて慎重だったのです。創立大会の当日、私は用事があって会場で吉野さんを探しましたがお会いできなかった。吉野さんは出席していないか、出席しても途中で帰ったと思いますよ。

——吉野さんが世話人になることを躊躇されたのは、どのような理由からでしょうか。

**増山** これは私の勝手な推察です。吉野さんは、連盟の結成を企画・準備する背後に日本共産党が存在していて結成後も糸を引くのではないかと警戒していたのだと思いますね。また徳田球一が嫌いだった。

だが当時の日本共産党は出版界や、知識人と文化人に対して、現在では想像できないほどの影響力をもっておりました。

他方で、吉野さんは岩波の顔というか「岩波文化」を代表する存在で、吉野さんが発起人に名を連ねますとジャーナリスト連盟自体、組織として広がりをもち、世間からも色眼鏡で見られない。また吉野さんが連盟に入ることは岩波書店にとってもメリットがありました。

——どのような？

**増山** これは出版社に対する用紙割当の問題と関係します。当時、商工省に用紙割当委員会が設置されました。委員は学識者や業界代表な

どから選ばれ、出版部会は雑誌の新規発行や割当量を審議・決定する権限が与えられていました。

この出版部会の委員を誰にするか、岩波書店のみならず、講談社や主婦之友社など「戦犯出版社」のレッテルが貼られた出版社においても最重要な関心事となっていました。この委員を選ぶ推薦母体となったのが事実上、日本出版協会で「民主出版社」といわれる日本共産党系の出版社が影響力をもっていた。

用紙の確保は、新聞社であれ出版社であれ、まさに「生命線」でした。日本出版協会や共産党系の学者・文化人は、出版部会における業界代表の委員に岩波書店を推すことにしました。だから私の記憶が間違いないければ、出版業界の代表の一人に岩波の専務だった小林勇さんが就任しています。

話を吉野源三郎さんに戻しますね。私の成城高等学校の後輩に岩波雄二郎さんがいます。岩波茂雄の二男です。雄二郎さんは戦争中、戦争反対の旗を振ることはなかったけれども、リベラリストで、民主的な考えの持ち主でした。私はやはり吉野さんにどうしても発起人になってもらいたいと思い、岩波雄二郎さんを通じてこれをお願いして了解を得たのです。雄二郎さんは1946年春、岩波茂雄さんの死去に伴って社長に就任しています。

### 連盟結成の構想

——綱領の問題性や、ジャーナリスト連盟と新聞単一との関係につきましては、のちにまとめてお尋ねいたします。その前に、そもそも連盟の結成はどなたが発案されたのですか。

**増山** この間、記憶を整理しておりました。確実なことは、ジャーナリスト連盟の結成は、あなたが「質問書」で書いているような読売従

組あるいは日本共産党の読売細胞が発案・企画したのではない。

——では誰が発案・企画したのでしょうか。日本共産党ですか。

**増山** いや、共産党はまだ再建されていない。共産党が組織再建を準備するために全国協議会を開いたのが1945年11月8日です。読売細胞はこれにあわせて結成しました。共産党が労働組合結成や労働運動の方針を打ち出すのは、1945年12月1日の第4回大会以降のことです。ジャーナリスト連盟の結成に関する構想ないし検討は、これ以前にすでに1945年11月初旬になされていました。

私がジャーナリスト連盟の結成を手伝うようになったのは、読売細胞ができて小林一之さんや白川晴一さんと連絡がとれてからのことです。これ以前に、1945年11月に入ってから鈴木東民さんから「全国新聞通信従業員組合連合会の準備会の会合に出てくれないか」と頼まれました。

全国新聞通信従業員組合連合会とは、読売従組が1945年10月31日に朝日、毎日、東京、中部日本、共同、時事、日本放送協会など準備中の組合を含めて結成したものです。この連合会のはのちに新聞単一として結実しますが、新聞通信放送労組の全国組織の結成をめざした組織で準備会として生まれました。だから私は当日の会合に出ていないけれども、連盟結成の構想というか検討は1945年11月初旬になされただろう、と推測しています。

——全国新聞通信従業員組合連合会（準）の代表者はどなたですか。

**増山** 代表者は選ばなかったと思う。もし代表者が選ばれていたとするなら鈴木東民さんか聴濤克巳さんでしょう。当時の状況から二人以外の人物が代表になることは考えられない。連合会の事務所は読売従組に置かれ、小林一之さ

んが連絡事務をとって、会合でもたいてい彼が司会をしていました。

### 黒木重徳と読売細胞の結成

——小林一之さんは新聞人なのですか。

**増山** 昔は新聞記者だったらしい。戦争中は「神戸新聞」の論説委員をされたと聞いています。当時、小林さんは白川晴一さんと同じ共産党の組合対策オルグで、主に新聞関係を受けもっていました。私が読売細胞を立ち上げるとき、にわか作りで竣工した代々木の党本部に黒木重徳（くろき・しげのり）さんを訪ねて相談した。そうしましたら小林さんも一緒に出てきてびっくりした記憶があります。

——黒木重徳さんは再建日本共産党の事務長をされた方ですね。

**増山** そうです。黒木さんは1945年10月10日、徳田球一・志賀義雄さんと府中刑務所を出た政治犯釈放組です。京都帝大の社研の大先輩で、1933年に共産党京都地方委員会を組織した人物としても知られます。

1945年10月下旬、読売従組が結成された翌日だったと記憶していますが、黒木さんが突然、築地本願寺の読売本社の仮事務所に坂野善郎さんを訪ねて来ました。坂野さんは政経部長でした。黒木さんが面会室ではなく、通常はあり得ないのですが編集局に通されました。坂野さんは黒木さんに会うや「おうっ」と言ったあと絶句して、二人は手を握りながら唸るような声で泣いていました。私も呼ばれて、坂野さんの隣にいて頬を濡らしてしまいました。黒木さんと坂野さんは京都帝大社研の同窓で、坂野さんが後輩でした。

仰るように、黒木さんは日本共産党の事務長でした。「府中組」でもピカッと光る存在でしたね。徳田球一が黒木さんに絶大な信頼を寄せていたことは、1946年2月の第5回大会で政治

局員と書記局員を兼ねた人事をおこなったことでもわかります。残念なことに黒木さんは翌月、戦後最初の総選挙に立候補して、立会い演説の最中に過労がもとで意識を失って倒れ、急死しました。共産党にとってとてつもなく大きな痛手になったと思いますね。読売細胞は黒木さんの指導で結成されたのです。

——読売細胞のメンバーをお聞きしてよろしいですか。

**増山** 隠すような事柄ではないでしょう。私自身『読売争議 1945/1946』（亜紀書房、1976年）でも紹介しました。メンバーは編集局のなかでは吹田秀三、山主俊夫、宮本太郎などです。細胞長は私です。読売細胞は徳田体制のもとで正式に本部承認を得たもので、宮本体制ではこれを認めていませんが、経営における細胞第1号となっています。

宮本太郎君の話では読売細胞を結成する少し前に、これも小林一之さんの指導で外部に「日本新聞細胞」という組織を読売関係者3、4人で結成したらしい。ただしこれは本部の承認を得ていない。読売細胞は、私らがつくった細胞と宮本君らが外部につくった細胞を合体してきたものです。

関連してこのことも紹介しておきます。新聞単一の結成は1946年2月9日で、産業別全国組合としては日本で一番早い。そして、新聞単一は結成大会において他の結成準備中の組合に対して、産業別単一の形態における全国組合の結成や、これを土台とするナショナルセンターの結成を呼びかけています。

この新聞単一の呼びかけは、1946年8月19日に産別会議（全日本産業別労働組合会議）として結実します。小林さんはこの新聞単一の書記となって、いわば新聞単一を代表する形で産別会議を結成する準備会の事務局の責任者を務め、正式結成と同時にそのポストを細谷松太さ

んに譲っています。これら新聞単一における小林さんの活動については、新聞労連編『新聞労働運動の歴史』（大月書店、1980年）に記録されていないのです。

### 新聞単一の機能を補完

**増山** われわれは新聞単一の結成過程において、労働組合をどのような組織形態で再建すべきかについて検討を重ねました。全国新聞通信従業員組合連合会の準備会の会議で、いちばん時間を割いて討議したのも、この問題でした。

われわれは当初、企業を単位とする組合で、かつ工具と職員が一体となった工・職混合の従業員組合が穏当であろうと思い、全国組合についても従業員組合の産業別整理、すなわち新聞通信放送の単一化を考えておりました。だから従業員組合連合会という名称になっているのです。

ところが1945年の11月下旬と記憶するが、私も出席した会議で全国新聞通信従業員組合同盟という、AFLすなわちアメリカ労働総同盟＝日本労働総同盟の組織路線に変わりました。これは総同盟からの働きかけがあって変更したのです。総同盟の組織路線は、企業単位の従業員組合を基礎としながらも、記者の職能が、想定される従業員組合の産業別整理より考慮されるのではないかと判断したのです。「毎日」から出ていた準備委員も総同盟路線を支持しました。

——総同盟のどなたが働きかけたのですか。

**増山** 荒畑寒村や高野実ですよ。読売従組でも渡辺文太郎さんが「総同盟派」でした。また全国新聞通信従業員組合連合会の準備委員にも、日本社会党や総同盟に親和性を抱く人がおりました。小野俊一さんなんかがそうです。

このことはあまり記録されていないが、読売

争議（第1次）では日本社会党や総同盟が何回か動員をかけて集会を開き、戦争責任を認めようとしない正力社長に対しても抗議するなど支援してくれました。社会党や総同盟が支援してくれたから、読売争議が世論の支持を受けて勝利したという側面もあるのです。

他方、日本共産党はどうか。徳田は1946年2月の第5回大会で「共産党が応援したから読売争議が勝利した」と報告していますが、共産党の応援で勝利した事実はないし、威張って報告するほどのものでもない。第一に共産党は読売争議中、府中刑務所を出たばかりで再建もされていない。

正直言ってわれわれ自身、当時、すなわち1945年11月の時点において、AFLとCIO（産業別労働組合会議）のどちらが記者の職能を重視した路線なのか理論的に、また歴史的に分析・検討していたわけではない。労働組合における組織論の何が基本なのか、私自身詰めていたわけではなかった。

ところで小林一之さんのオルグは、労働組合の全国組織の結成においては新聞単一と印刷出版という産業別の労働組合を別個に結成したいということと、新聞単一という形態で全国組織が結成された場合、新聞、通信、放送の記者などの編集・制作を担う職能的な問題が必ずしも考慮されない懸念があるので、組合とは別個に職能性を問題にする組織を結成してこれを補完したい、という内容だったと記憶している。われわれはこの方針にそってジャーナリスト連盟の結成に取り組むことになったのです。

——新聞単一のあり方として、運動路線としても記者や編集者の職能問題は扱わないということですね。

**増山** そう受け止められますね。新聞単一といっても企業別組合の連合体ですから対象は使用者との関係、すなわち賃金や労働・雇用の問

題が基本になります。要するに労使関係がメインとなります。

こうした把握が問題であり、むしろ新聞単一の結束を結果として弱めたと思いますね。この点、同じ産別会議の日映演（日本映画演劇労働組合）の組合にも言えると思います。あなたは東宝争議をご存知ですか。

——1948（昭和23）年4月の争議のことでしょうか。

**増山** そうです。あの東宝争議は根底に職能の問題があり、日映演の指導部がこれに十分対応できなかったため爆発したのです。これが東宝争議の本質です。同じ組合員でも労働の質が違う。俳優や演出家、シナリオ作家、舞台衣装家、映写技師とその他の制作技術者や事務労働者とは職能が違います。同じ映画産業労働者だからといってみな賃金も同じというわけにはいかないだろう。

この点は新聞単一にもいえます。けれども日本共産党における労働組合の結成路線、すなわち産別会議の路線は必ずしも労働の質や職能性を考慮していなかったと思いますね。

他方でこういう問題もありました。新聞、通信、放送産業に従事する労働者を大きく結集してまずは産業別の統一を果たし、同時に、利害や労働の質に伴う問題については外部の運動を通じて、すなわちジャーナリスト連盟を通じて共通の課題として受け止め、これを各企業に要求するという、経営側に対して二重に攻め口を確保するというねらいもありました。

この攻め口はまったく実践されなかった。ジャーナリスト連盟は、私が聴濤さんや小林さんから聞いていた構想とは似ても似つかない組織として、むしろ政治団体的な組織として誕生してしまったのですね。

私が小林一之さんからジャーナリスト連盟の設立の構想を聞いたときには、ジャーナリスト

の職能性を要求しこれを実現する組織であって、新聞単一の機能の一部を補うということで話を受け、読売従組が中心になって結成を担ってほしいと頼まれたのです。これが、後でも述べますが民主主義編集者同盟と合体・合流して、また変な形の職能団体になってしまったのです。

### 結成は単一化の組織化とリンク

**増山** ところがこんどは1945年12月初めに、日本共産党の第4回大会が終わった直後のことです。鈴木東民さんが「増山君、組合は産別会議の方式でいく。もう決まった」と私に断定的に言ったのです。

東民さんによれば、GHQの労働組合課と折衝するうちコンスタンチノフとかい課長や、のちに課長になるセオドア・コーエンから「AFLの路線ではダメだ。CIO（全米産業別労働組合会議）のほうが望ましい」と助言されたというのです。CIOの組織路線は企業横断の産業別組合を特徴としていて、しかも個人加盟制が原則となっていました。これは、当時結成されたばかりの世界労連の組織路線でもありました。

——日本共産党は戦前以来、産業別組合の結成を方針としていますね。

**増山** そうですね。評議会も全協もそうでした。とにかく新聞通信放送の単一化が確定したのは1945年12月、日本共産党の第4回大会が終わった直後のことです。

東民さんからの「通告」を経て、全国新聞通信従業員組合同盟の準備委員の会合がもたれ、このときは小林一之さんからGHQとの折衝の経過報告もなされて、新聞通信放送の単一化の方針が決まったのです。

関連して、このことも紹介しておきます。新聞通信放送における単一化の方針決定におい

て、総同盟の路線に一貫して反対していたのが「日経」の堀卯太郎さんや吉村英さんでした。二人は「総同盟方式では組合の自主性や階級性は確保できない」と、戦前期における総同盟運動の歴史を例示して、渡辺文太郎さんの主張に反論していました。単一化の決定にはGHQの助言だけでなく、往年の闘士の主張も影響を与えたと思いますね。

ところで新聞単一の結成方針が決まったといっても、準備委員において記者や編集者の職能問題について検討がなされることは少なく、むしろ運動方針などに職能的な要求を盛り込むことに躊躇する雰囲気がありました。

——なぜですか。

**増山** 職場や組合統一の課題や生活課題が優先されていたのです。読売の場合でも職員と工員の身分差別や、職員にも社員、準社員、雇員、傭員などがあって賃金や雇用、就業条件に厳然とした身分差別がありました。私らは読売争議の勝利を得て1946年2月にこれを撤廃させましたけれども、これらの差別を撤廃して平等性を確保することが当時、組合運動において重要な課題でありました。

また敗戦を経て食糧がなく、主食の米も遅配・欠配で、そのうえ猛烈なインフレで、まずは生活を防衛することが重要な課題とされていました。賃金の3倍、5倍引き上げや手当ての支給など待遇改善の課題、あるいは読売の場合、厚生年金の継続なども要求にあらりましたが、とにかく生活を維持することが最優先の課題とされたのです。

こうした実態が存在するところに、記者の職能性や固有性を持ち出して、われわれの固有の権利だなんて主張すればどうなるでしょう。工場現場、すなわち印刷部門などからは「差別を助長するのではないか」と反論される懸念がありました。だから職能問題の扱いは外部で、す

なわちジャーナリスト連盟で扱うという分離論になってしまったのです。

当時、労働組合のあり方として、私自身、クラフト・ユニオンにすべきではないかと考えたこともありました。また実際に、クローズド・ショップ制の産業別組合を結成することこそ重要であろう、と考えもしました。

このことも紹介しておきますね。私らは新聞記者という身分で「朝日」であれ「毎日」であれ、あるいはあなたが研究していた「民報」であれ、組合が、経営に対して発言権をもって記者の就労希望を認めさせ、その上で職能の問題や労働条件を改善していくという構想をもって交渉したことも、実際にあったのですよ。経営側はあまりにも大胆な提案にびっくりしていましたね。当時、これらは理想に近い形のアイデアであり、提案でしたけれども、経営側は頑としてこれを受け付けなかった。

——すごい提案ですね。

**増山** 経営側がこれをはねつけたのは当然です。新聞事業における企業支配を崩すものですからね。企業支配のテコは人事ですからね。

他面で、日本の新聞社は1920年代以降、編集と工場が一体となって経営されている構造となっていて、組合も企業内組合的な構造になっていました。だから編集部門のみが職能性を主張することに対しては、それは必要であり重要だけれども、躊躇されるという雰囲気があったのです。

新聞単一における組織路線が、産業別統一の方向と確定した時点において、企業内においてあるいは組合において職能の問題を扱うことに限界があったのです。また新聞単一それ自体、経済要求闘争に偏ってしまい、職能の問題について重視する方針を必ずしも掲げていなかったのです。

このようないろいろな事情や問題が重なっ



て、新聞や通信・放送記者における職能の問題はジャーナリスト連盟において企業横断的に取り組もう、ということになったわけですね。私は現在もこれが問題だったと考えているのです。

### ジ連盟結成の準備委員

増山 ジャーナリスト連盟の結成は、日本共産党の提案もあって全国新聞通信従業員組合同盟の準備委員の有志により取り組まれました。「結成準備委員会」という名称の組織はなかったけれども、新聞単一の役員の場合と同様に、事実上、聴濤克巳さんと鈴木東民さんが代表者で「毎日」からは最初は平岡敏夫さん、ついで牧野純夫さんが出席して発言していたと思います。私は東民さんの代理という名義で会合に出ていました。

ほかに準大手の「日経」や、ブロック紙を代表する形で「中日」東京支局の方や、「北海道新聞」と名乗って出席していた方もおりました。また東京の新興紙を代表して民報社の長島又男さんや、砂間一良（「民衆新聞」）さんも会合に出ていました。もちろん日本放送協会や「共同」「時事」からも準備委員が選ばれていたわけですが、顔が浮かんでも名前が出てこない。

あなたがコピーを送ってくれた『日本出版年鑑』（昭和19年～21年版）の資料に、ジャーナリスト連盟の常任委員の「氏名一覧」がありました。日本放送協会からは柳澤恭雄さんの氏名があげられていましたね。私の記憶では、柳澤さんは連盟結成の準備委員になっていない。NHKから準備委員として出ていたのは柳澤さんではなく、私が1946年に新聞単一の副委員長に就任したときに役員になった方です。こんど柳澤さんに会うそうですが確認をとってください。

——はい。ところで結成準備の事務局は読

売従組に置かれたということですね。

増山 ええ。鈴木東民さんから「増山君、頼む」と言われて創立大会までの準備を引き受けました。新聞単一の場合、委員長は聴濤克巳さんで「朝日」から出ています。連盟の結成準備も、本来なら朝日従組の森恭三さんや広岡知男さんが引き受けるべきだったでしょう。聴濤さん自身、常々「朝日が新聞単一を牽引するんだ」と広言していたわけですからね。

二人はライバル関係にありましたから、たぶん東民さんが聴濤さんと張り合って「ウチでやる。任せておけ」と言ったにちがいない。東民さんは気が短いだけでなく、見栄を張るところがありました。人事も企画も、自分で勝手に決めて押し付けることがありました。

ジャーナリスト連盟結成の準備事務を読売従組が担うことになったのも、組合にも私にも事前の相談がなかった。たぶん東民さんは格好をつけて、勝手に引き受けてきたに違いない。おかげで私は、毎日が「手帳」に書き込めないほどの日程となっていて、目が回る忙しさでした。40歳前だからやり切れたのですよ。

### 鈴木東民について

増山 鈴木東民さんは「読売」では編集局長、論説主幹、経営協議会委員（組合側代表）、読売従組の組合長（のち議長）を兼ねていました。社外においても新聞単一の副委員長をはじめ、自由懇話会の理事、関東食糧民主協議会の議長などに就いていました。東民さんは、編集局長という新聞社において最重要な仕事を次長の坂野善郎さんに任せきりにして、演説会場をはしごしていたのですよ（笑）。

東民さんはとにかく演説が好きでしたね。また身振り手振りを交えてぶつ演説は徳田球一のそれと似ていて話もうまく、聴衆に受けていました。聴衆は、東民さんのアジ調の演説に魅了

されてましたね。

演説が好きで飛び歩くことに問題があるのではないのです。本務を果したうえでの社会活動なら認められるでしょう。東民さんの場合は本社にいないか、いても所在がつかめなかった。また東民さんは、編集局の会議で合意した、本人も決済した企画や計画を突然変更することがありました。

——社内で文句が出なかったのですか。

**増山** 出ましたよ。批判・非難が隠然としてありました。坂野さんが困り果てて、東民さんに「新聞づくりに専念してもらわなきゃ困る」と度々注文をつけていたのですが、行動パターンは変わらなかった。

私は自慢したいという気持ちなど微塵もありませんよ。読売従組は当時、労働組合を結成・促進するためのセンターのような存在になっていました。当時といっても1945年11月～1946年2月のことです。

この時期は、東京地方だけでなく、全国から「組合結成を指導してほしい」「就業規則を見せてほしい」「団体交渉に立ち会ってほしい」といった電話や手紙が組合事務所や本社に寄せられました。東民さんが集会に出て、演説で「相談があれば読売従組に連絡をしてくれ」とぶっていたのです（笑）。

私はたまったもんじゃない。私は切れてしまい、東民さんに「組合の土台をきちんと固めることが大事じゃないですか」と抗議しました。そして、私は抑えきれなかったのだろうね、爆発したついでに「即時にやれと言われても、やれるものとやれないものがある。優先順位をつけるべきですよ」と言い返したことがありました。

——東民さんは何と？

**増山** 馬耳東風ですよ。東民さんが動けば動くほど私の仕事が増えました。私は記者として

の本務のほかに、組合書記長としての仕事があり、東民さんを補佐して新聞単一の結成へ向けた実務もタッチしていたのです。これに、ジャーナリスト連盟の創立準備委員の仕事が加わりました。組合の書記長を除く、新聞単一結成の事務やジャーナリスト連盟の創立準備委員の二つは、東民さんが勝手に引き受けて私に押し付けたのです。東民さんはわがままでワンマンな方でした。

関連して、東民さんについてこのことも紹介しておきます。読売争議（第1次）に勝って編集局長に東民さんが就任しました。けれども、客観的に判断して「安田さんでいいじゃないか」と言う組合役員もいました。私も坂野さんもそうでした。

——どのような理由で？

**増山** 東民さんが書いた社説や論説が、新聞記事における公平・厳正さにおいて欠ける傾向が一つありました。また正力社長に対する経営責任や戦争責任に関する追及も、個人的な感情を剥き出しにした表現になっていて、これらが編集局において「言い過ぎじゃないか」と問題になることがありました。

業務管理中の「読売」をご覧ください。正力社長をヒットラー呼ばわりした記事もありますよ。東民さんご自身、トップ・リーダーを断罪するときはこの種の記事を書くことが多かったのです。東民さんに「一事をもって断罪する」という傾向がありました。

もし安田さんが編集局長になっていたら、第2次読売争議は起こらなかったかもしれない。安田さんは「僕は戦争に反対だったが陸軍省顧問に推されて、仕事上ことわるわけにもいかず、砂田重政（司政官）の随員として南方に行っているから戦争責任があるんだ」と辞退したのです。

## 馬場新社長と東民

増山 このことは、ジャーナリスト連盟の結成とは関係ない事柄です。東民さんに関して話した流れで紹介しておきたい。

1945年12月に読売の臨時社員総会が開かれました。正力松太郎さんが戦犯追放となったのを受けて開かれた新役員を決める会議で、代わって馬場恒吾さんが社長になりました。東民さんは、新社長の馬場さんに対して敬意を払わずにきわめて高圧的で、非道な態度で臨みました。

馬場さんは明治末期－大正デモクラシー期に活躍した、リベラル派のジャーナリストとして知られていますね。戦争中は「東洋経済新報」の石橋湛山らと戦争の拡大を憂え、軍部に対して批判的な言論を発して執筆禁止となるだけでなく、特高刑事から監視されていました。

——馬場さんも「小日本主義」を主張していたのですか。

増山 いや、それは知らない。敗戦となって馬場さんは評論家仲間の杉森孝次郎、室伏高信、岩淵達雄らと憲法研究会に参加して、国民民主権の新憲法を制定する運動に取り組んでいました。憲法研究会の代表は、あなたの研究所（大原社会問題研究所）の高野岩三郎先生で、事務局長は憲法学者の鈴木安蔵さんでした。

——研究所の森戸辰男さんも憲法研究会のメンバーでした。

増山 そのようですね。「読売」は編集局の会議において、事務局長の鈴木安蔵さんからの要請もあって憲法研究会の活動を重視して報道し、あわせて新憲法制定の啓蒙に努めることを決めました。憲法研究会や新憲法に関する記事においてキャンペーンを張ったのは、総合紙では「読売」だけであり、これは坂野善郎さんの大きな功績だと思います。

鈴木安蔵さんは京都帝大を中退していますが、私や坂野さんの先輩にあたります。鈴木さ

んは哲学科を途中でやめ、経済学部へ転部して研究者の道をめざしたそうで、坂野さんは鈴木さんの1年後輩でよくご存知でした。

実は1945年10月末か11月初めに、鈴木安蔵さんが読売本社の仮事務所に坂野さんを訪ねて来て「新しい憲法の制定に関しては是非、人民主権を基本に、人民が参加する国民運動として制定したい。ついては、このことの重要性を訴える憲法研究会のメンバーによる座談会を開催してもらえないだろうか」という話が提案されました。

「民主読売」ならでの企画で、坂野さんの存在あって持ち込まれたものではないでしょうか。東民さんも「よい企画だ」と言って了解していたのです。これが「民主主義獲得への途（本社座談会）」という記事タイトルで、1945年11月4日から11月9日まで5回にわたって連載されました。

——知りませんでした。

増山 この座談会は評判が良かった。座談会は連載が始まると各界で注目され、日本の政治に、あるいは日本国憲法の制定に少なからず影響を与えたと思いますね。

当初この座談会には馬場恒吾さんの出席が予定されていました。実際の出席者は、憲法研究会のメンバーでは室伏高信、岩淵辰雄と鈴木安蔵さん、それに民衆新聞社の小野俊一と貴族院議員の徳川親就、志賀義雄（日本共産党）、松本治一郎代議士（日本社会党）でした。馬場恒吾の出席は直前に外されたのです。

馬場さんに代わって岩淵辰雄が出席しました。なぜ岩淵さんとなったのか。東民さんが「岩淵でもいいじゃないか、読売の関係者なんだから」と横槍を入れて岩淵さんとチェンジしたからです。東民さんはとにかく馬場さんが気に入らなかつた。東民さんは極端に人の好き嫌いを態度で表す向きがありました。

もう一つ、こういう問題もありました。正力さんの戦犯指定が確実に予想され、代わって馬場さんが1945年10月末の時点で次期社長になることが決まりつつありました。東民さんは馬場さんと肌が合わなかったのですね。オールドリベラリストの馬場さんと、戦闘的で急進的なリベラリストである東民さんとはいわば「犬猿の仲」だったのでしょね。

——なるほど。

**増山** 敗戦は民主主義日本の建設に黎明を告げるものでした。廃墟のなかから新日本を建設するための方策を打ち立てなければならぬ。馬場さんは社長に就任しても、平和日本再建の方策や、持論であった象徴天皇制などでも自らのオピニオンを「読売」で発表したかったです。

馬場さんは1940年以来、東条内閣のもとで執筆を禁止されていました。だからなおのこと、馬場さんは時代の転換期に言論人として論陣を張りたかったと思いますね。

当時『言論』（高山書院、1946年1月創刊）という雑誌がありました。小林英三郎さんが編集していた雑誌ですが、馬場さんはその『言論』創刊号に「日本よ立ち上がれ」と題した論文を発表しています。国民に対して新生日本をデモクラシーと平和の理念をもって再建しようと訴えたもので、実に感動的な論文です。

馬場さんは「読売」でも論陣を張りたかったのです。けれども東民さんは論説委員会の幹事に「弟分」の志賀重義さんを指名して、志賀さんは志賀さんで、こんどは東民さんの意向を受けて左に偏り過ぎた論説を発表していた。まことに問題なのは志賀さんが、馬場さんが書いた社説や論説をボツにして、あるいは勝手に修正して発表していたことですよ。こんなことは現在では考えられない。

馬場さんはこれに大変不満だったようです。

馬場さんは温厚な性格だったから「そうかね」としか言わなかったけれども、心底煮え繰り返っていたと思いますね。

「読売」の記事については、これは「民主読売」時代ですけれども、GHQのインボーデン新聞課長から「総合紙としての体裁をなしていない」と指導・勧告を受けておりました。インボーデンからは「新聞製作は客観的事実を報道し、オピニオンを主張するときは反対のそれも紹介し、読者が公平に判断できるようにしなければならない」と再三指導を受けていたのです。

けれども東民さんはGHQの指導も、編集局内における同僚の忠告や意見を無視してこれを受け付けなかった。東民さんはワンマンのみならず、通常では理解できない偏狭さがあり、GHQも読売本社もこれを放置できなかったと思いますね。経営側が、人事権を発動して東民さんらに対して退職を勧告し、次いで解雇という形で排除を試みたのは理解できなくはない。

——読売争議は労使関係だけの問題ではなかったのです。

**増山** こっちにも問題があったということでしょう。第2次争議が勃発した理由のいくぶんかは、組合運動というよりは紙面編成において総合紙のあり方や、GHQのプレスコードを超えてしまったこと、また東民さん自身の人格や行動における偏狭さに起因していることが少なからずあったと思いますね。坂野さんがいくら進言しても、東民さんは聴く耳を持たなかった。

#### 小林雄一の協力

**増山** 話をジャーナリスト連盟に戻しましょう。最近、夢や、妻とお茶を飲んでいると小林雄一さんの顔が浮かぶことがあります。この機会に是非、小林雄一さんのことを紹介しておき

たいのですが。

——どうぞ。

**増山** 私は日本新聞協会の『別冊新聞研究』の編集部の方から聞いたのですが、ジャーナリスト連盟の結成についても、小林雄一さんについても記録されていないということです。ジャーナリスト連盟の結成の経過や経緯は別にして、私自身、小林雄一さんに相談しアドバイスを心得準備したのです。

——小林雄一さんは、吉野源三郎さんに次いでJCJ（日本ジャーナリスト会議）の議長に就任していますね。

**増山** そうです。まず名称ですが、当初われわれが考えたのは「日本記者連盟」というものでした。長島又男さんは「日本記者同盟」とか「日本民主主義記者同盟」を主張していましたね。

ところが小林さんは、新聞・通信・放送記者だけの組織として結成するのは問題であるとして、現在は労働メディアと呼んでいます。政党や労働組合の機関紙・誌の編集者や、雑誌編集者、言論・評論界で活躍する知識人や文化人もメンバーとして、名称についても「日本ジャーナリスト連盟」としたらどうかと提案したのです。

この小林さんの提案は、私が東民さんや長島さんに事前に、彼の発案だということを伏せて説明し、発起人会において承認されました。

——小林雄一さんはどのような意味合いで提案されたのでしょうか？

**増山** まず、進歩的なジャーナリストを広範に結集するという組織論があったと思います。小林さんは新聞社とか出版社とかのメディアで集うのではなく、ジャーナリズム産業に従事する記者・編集者や、映画・映像製作者、論壇で活躍する進歩的な知識人・文化人が多数集まって新生日本を民主主義国家として再建すべ

きであろう、これも戦争の拡大を止め得なかったジャーナリストの責任であろう、と考えていましたね。

——実際にジャーナリスト連盟は事業体を問わない形で、しかも個人加盟制を採用していますね。

**増山** 連盟は「綱領」の第1条で「民主主義的ジャーナリズムの確立」をうたっています。「規約」の第2条でも「本連盟は民主主義ジャーナリズムの確立を目的とする」とうたっています。小林さんが意識していたのは、進歩的なジャーナリストを統一・結集して日本に民主主義ジャーナリズムを確立すべきで、そのための自主的組織として連盟を結成するという構想だったと思います。要するに進歩的ジャーナリストの大同団結をめざすべきだと強調していました。

「綱領」の作成においても、小林さんは重要な提案をおこなっています。「綱領」の第5条に「各国に於ける民主主義ジャーナリストとの提携」とありますね。これも小林さんの提案で「草案」に入れられ、発起人会で了解を得たものです。

この意味するところは、小林さんは、新聞人としての戦争責任をとりわけ重視していました。それで自らの記者活動における過誤を検証するだけでなく、世界のジャーナリストや甚大な被害を受けたアジア各国のジャーナリスト、とくに新しく生まれる新生中国の新聞人との連帯と交流は日本ジャーナリズムの発展においても不可欠だろう、と考えておりました。彼はJCJでも中国のジャーナリストとの連帯・交流を提案していたと思います。

当時、小林さんは「読売」を休職中でした。けれども週に1、2回本社に顔を出して論説委員会の仕事を手伝い、組合事務所にも立ち寄っていました。小林さんは1948年7月に欧米部長

として編集局に復帰して、これも主筆で編集局長に就任した安田庄司さんの片腕になります。小林さんは1950年代、ヨーロッパ総局長や編集局次長として「読売の顔」になっています。私は読売に入社して以来、小林さんを親分として尊敬してきました。

——小林さんの休職の理由は何ですか。

**増山** ニューヨーク支局長だった小林さんは、太平洋戦争中の1942年8月に日米交換船の浅間丸で帰国しました。そして、彼は帰国後も短波無線機を使ってアメリカ軍の動静やアメリカの産業界に関する情報を得て、これを記事にしていました。当時彼が短波無線で情報を得て書いた記事は読む人が読めばわかりますよ。

ところが1943年7月に彼は東京憲兵隊に検挙され、社長の正力さんや外報部長の田中幸利さんも取調べられたのです。戦時中は新聞も放送も軍の監視・監督下にあったわけですが、これをおしての無電傍受だったからです。

——どんな容疑だったのですか。

**増山** 防諜すなわちスパイの容疑でした。要するに小林さんがアメリカに通じていたのではないかと疑ったようです。1941年10月にゾルゲ事件で尾崎秀実が検挙されていますね。だから政府の情報局でも検閲担当官が「読売」の記事を子細にチェックする事態となり、正力社長は「読売」が発行停止になるのではないかとえらく心配し、先手を打って小林さんを休職扱いにしたのです。

敗戦となって、小林さんにとってまた難題が起きました。こんどはGHQの参謀第二部が小林さんに出頭を求め、彼が日本軍のスパイだったのではないかと疑ってニューヨーク支局長時代の記者活動や、帰国後における無電傍受について尋問調査をしたのです。

こんな経緯があって、小林さんの復社が遅れたのです。このことは現時点で考えてみると

ジャーナリスト連盟の結成を早め、結果的によかつたかもしれない。私は戦争中も戦争が終わったのちも、井荻1丁目（杉並区井荻町）に小林さんを訪ね、泊りがけで話し合うことができましたし、ジャーナリスト連盟の結成についても彼に相談しながら準備したのです。

### 「民主主義編集者同盟」との合流

**増山** 日本民主主義文化連盟編『文化年鑑』（1949年版）に、小林英三郎さんが日本ジャーナリスト連盟の「事業活動」を報告しています。小林さんはこの報告で連盟の成立について「別に雑誌編集者のあいだに組織を準備されていた民主主義編集者同盟がこれに合流することによって、連盟はこの国で唯一の進歩的ジャーナリストの組織となった」（228頁）と書いていますね。

ジャーナリスト連盟は、われわれ新聞・通信・放送産業に従事する、のちに新聞単一に結集する進歩的ジャーナリストと、美作太郎、佐和慶太郎、伊藤長夫、それに小林英三郎、梶谷善久さんなど雑誌出版社の編集者が設立した「民主主義編集者同盟」が合流して結成され、両者を主体に、これに映画・映像製作者や民主陣営に立つ評論家や知識人が合体して生まれたものです。だから連盟には「新聞部会」「雑誌部会」「映画・写真部会」といった部会があったのです。

——民主主義編集者同盟は、1945年11月に日本出版協会に加盟する左翼系の出版社の編集者により結成されているようですね。

**増山** 民主主義編集者同盟については多少、記憶が残っています。代表は日本評論社専務の美作太郎さんだとは思いますが、実際は人民社の佐和慶太郎さんや伊藤書店の伊藤長夫さんなどが中心となってつくった組織だと理解しています。事務局長は高山書院編集長の小林英三

郎さんでした。

私は、美作さんとは日本評論社を訪ねて2、3回、ジャーナリスト連盟の結成の段取りや、発起人の人選の件でお会いしました。けれども連盟の結成について先方の準備委員と会うときは、たいてい西銀座4丁目の三木ビルにあった人民社でした。民主主義編集者同盟の事務所は人民社に置かれていたのです。

人民社は敗戦直後における出版関係者の溜まり場になっていました。読売本社の銀座の別館にも近かったので、小林さんとの打ち合わせはたいてい人民社でおこなっていた。いつ行っても出版関係者の会合がもたれて、喧々諤々の会議をしていました。

戦後すぐの時期、出版界においては戦争責任の追及が大きなテーマとなっていました。講談社、主婦之友社、旺文社、家の光協会、山海堂などは「戦犯出版社」として民主主義出版同志会によって糾弾されたのですが、その民主主義出版同志会の事務所も人民社に置かれていたと思います。

——人民社があった三木ビルは4、5年前まで映画館の「銀座並木座」として残っていたようですね。

**増山** そうです。並木座は朝鮮戦争中に三木ビルを増改築して開館した、往年の名画を上映する映画館で、JR有楽町駅や地下鉄の銀座駅にも近く、東京では人気館の一つでした。

ところであなたが送ってくれた資料の中に「全日本出版印刷労働組合の組織経過と現状」(『日本労農通信』第39号、1946年4月20日)と題する「報告書」がありました。この「報告書」に、民主主義編集者同盟の目的として8項目が掲げられています。ここに挙げますと、

- (1) 言論・出版の自由を完全なものとする  
こと
- (2) 出版事業経営の民主化の促進
- (3) 編集者、従業員の社会的地位の向上と  
生活の擁護
- (4) 出版従業員組合の結成準備
- (5) 言論出版界の戦争犯罪人の摘発と放逐
- (6) 反動的執筆者の排除と民主主義執筆者  
の支持
- (7) 内外の民主主義的組織との緊密なる提  
携
- (8) 同盟員相互の編集、企画上の積極的批  
判と連絡をはかること

となっています。これは、われわれ新聞単一の連中が構想したものよりもはるかに職能問題を重視し、かつ広範囲に把握している点で驚きました。これを「日本ジャーナリスト連盟結成趣旨」や「日本ジャーナリスト連盟綱領」と対照してみましたが、「綱領」はむしろ民主主義編集者同盟のほうがよい。

この「報告書」を読んでもう一つ驚いたことがあります。私はこれまで民主主義編集者同盟については、ジャーナリスト連盟が設立したのち民主主義出版同志会に改組されたのであろう、と推測しておりました。

ところがこの「報告書」でも詳しく述べてありますが、文化団体ないし職能団体としての民主主義編集者同盟は、出版界の単一化を呼びかけ、のちに1946年4月7日に印刷出版労組(全日本印刷出版労働組合)の結成を準備したということです。民主主義編集者同盟はなんと印刷出版という労働組合の設立の母体を担い、そしてこれに発展的に解消していたのですね。

(つづく)